

理工学部人間総合理工学科／環境デザイン研究室
環境デザイン、都市再生デザイン、ランドスケープ

石川 幹子 教授

【プロフィール】 石川 幹子(いしかわ みきこ)▷1948年、宮城県生まれ。1972年、東京大学農学部卒業。1976年、ハーバード大学デザイン系大学院ランドスケープ・アーキテクチャ専攻修士課程修了。東京ランドスケープ研究所設計室主幹を経て、1994年、東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。1997～1999年、工学院大学工学部建築学科特別専任教授。1999～2007年、慶應義塾大学環境情報学部教授。2006年、ハーバード大学デザイン学部大学院客員教授、2007年～2012年、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授。2013年より中央大学理工学部教授。



対象となる土地の自然を分析し、そこで暮らす 住民の声を集約しながら、自然と人が 共生する新たな生活環境を創りだしていく。

地球環境問題が顕在化するなかで、いま改めて自然と人間が共生する新しい生活環境の創造が求められています。その対象は、庭園から、都市の公園あるいは広場、水辺の設計、そして都市全体のデザインに至ります。まず、その土地をよく知り、かけがえのない自然を見つけて守りながら、何よりもその土地で暮らす住民たちの声に耳を傾けて生活環境をデザインしていくスタイルは、石川先生ならではの。その研究の原点には、自然に関心があった高校生時代に、高度成長の陰で自然が急速に失われていく社会を何とかしなければ、という思いがありました。石川先生が切り拓いてきた、独自の魅力あふれる「環境デザイン」のスタイルをご紹介します。

住民の声を集めて活かす 石川先生独自のスタイル

「例えば洋服をデザインする人がファッションデザイナーであるように、都市のなかに美しい空間をつくるデザイナーが、環境デザインです」

そう語る石川先生は、環境デザインにおける「クリエイティブな力」の重要性を強調します。しかし、その前提には、対象となるエリアで長年育まれた自然と風土、そしてその土地に暮らしてきた住民の声を大切にすることがあります。

「どのような自然環境であるかを科学的にしっかり分析し、その場所を理解することが基本として必要です。そこから空間をデザインしていくわけですから、人々がどう利用したいのか、あるいはどのようにすれば美しい空間ができるかを実現できる芸術的な素養も大切です。

この二つを融合させて創造していくプロセスにおいて、最も大事なことは、そこで暮らす主役である住民の皆さんの意志です。日本では公共空間等を設計する際に、住民の意見を反映させるということは、これまで、あまり行われてきませんでした。そこで私は、1980年代から住民の皆さんと一緒にワークショップという形を通して空間を創ってきました。こうした方式で環境デザインを進めてきたのは、おそらく私がパイオニアだと思います」

対象となる土地の自然を よく知り活かしていくデザイン

四川大地震後の中国・都江堰の復興ランドデザインなど、世界に広がる石川先生の環境デザインのなかで、例えば日本都市計画学

会賞をはじめ各賞を受賞した岐阜県各務原市「水と緑の回廊計画」も同じステップで実現されました。

「市の中心に実現した“学びの森”は、岐阜大学付属農場の跡地で、見捨てられたような空き地でした。しかし、岐阜農林高等学校時代(大正期)に植えられた、20mを超えるユリノキの巨木をはじめ、様々な樹木があり、豊かな森にしていきたいという声から上がりました。そこで、住民の皆さんと共に毎木調査(1本1本の樹種、高さ、葉張り、幹回りを調べる)による自然環境分析から始め、さらにワークショップを通じて『この樹を守ってこんな空間にしたい』など自由に意見交換し合いながら、生物多様性とんだ美しい森のイメージを創り出していきました」

新たな生活環境の創造のためには「デザインをするプロが必要」と語る石川先生。しっかりとした環境デザインの技術と知識をもって、住民の意見をまとめデザインしていくリーダーシップが何よりも求められるのです。



▲各務原 水と緑の回廊 / 土地の巨木や地形を活かしたランドスケープデザイン(都市の広場や公園など公共空間のデザイン)を採用。「豊かなスケール感、なめらかに連動する空間構成、レストハウスとせせらぎなど各施設相互の関係性も秀逸」とは、2008年土木学会デザイン賞「最優秀賞」の選評。

その土地に固有の財産を 発見し受け継ぐ役割

石川先生は、自然環境を一つの生態系システムとして分析する植物社会学の視点で自然を見ていきます。そこには、何もない裸地から草本植物が生え、やがて落葉広葉樹が茂り常緑広葉樹林となっていく植物群落（一定の場所に生育し連関し合う植物の個体群）の遷移という時間軸も大切になります。受け継がれた自然を見つめながら、同時に50年後、100年後の未来の自然環境を想像していく。そのために環境デザインの専門家は「しっかりとした学問に基づく知識を基礎としてもってなければいけません」と先生は語ります。

自然環境を把握する際は、動物はもちろん気象や地形、土壌まで幅広く見ることは当然ですが、その地に固有の特性を発見し伝えていく能力も重要視されています。

「その場所の財産となる特性は、必ずしも常に明らかではありません。あまりにも当然で、住民の方ご自身が気付いていない場合が多いのです。例えば私がいま復興計画を手がけている宮城県岩沼市には「居久根（いぐね）」という北西風を防ぐ屋敷林があるのですが、津波で破壊された後も、あまりに当たり前の風景だったので、これが財産だと認識されていませんでした。しかし、冬がきて強い季節風が吹くようになり、議論を重ねるうちに『居久根は新しい町にとって大切なもの』ということが次第に共通認識となっていきました。このケースでも、専門家である私から何かを言うことはないのです。大切なのは、それを住民の皆さんが気付くことなのです」

正解がない創造的な 環境デザインの楽しさ

市民が参加して創りあげていく石川先生独自の環境デザインは、単に市民の声に耳を傾けるだけでは成立しません。

「住民参加という一見、簡単そうに聞こえるのですが、学術的な調査を踏まえてしっかりと進めないと、単に住民の皆さんの要求を取り入れただけの寄せ集めで、何でもありの空間になってしまう可能性があります。それでは意味がありません。住民の皆さんの意見を伺いながら理想像を求め、しかも質の高い美しい空間を創造していく作業は、専門家としての力量が問われる厳しいプロセスだと思っています」

そしてこれらのステップを踏まえ最終的に実現するのが、冒頭に挙げた“クリエイティブな力”。例えば専門家が使う技法の一つ

に石川先生は、「見え隠れ」の技法を挙げました。

「桂離宮には、見晴らしのいい庭園がありますが、わざわざ手前に一本の松を置いて、その後ろにちらっと池を見せるのです。松の木がなければ池は全て見えるのですが、すぐには見せず、あえて形のいい松を置いて『何かある、行ってみたい』と思わせるわけです」

環境デザインに関わる技法は、古来、様々な蓄積が行われてきました。大切なのは、環境デザインの専門家が多くの技法を蓄積し、それぞれ異なる空間に対して応用していくこと。決まった正解がないため、まさに創造的な世界になるのですが、何かを創り出す作業はとても楽しいものです」

日々、勉強を続けながら 新たなチャレンジへ

これだけの実績を積み重ね、技術を身に付けた石川先生なら、どんな空間を前にしても、もう大丈夫と思ってしまいますが、先生の口から出てきたのは「勉強」という言葉でした。

「一回ごとに新しく、常にクリエイティブな作業をしているので、きちんとプロとしてやっていくためには、毎日、毎日勉強し、新たな技法を積み重ねていかなければなりません。毎日がチャレンジそのものです。もちろん学生の皆さんにも創造的なデザイン能力を養う教育していきますが、そのためには自分自身が実践していないとできません。授業は、過去の知識のリピートではないのです」

環境デザインの素晴らしさは、新たにチャレンジしたデザインが何年も先の未来へ引き継がれること。それを成し遂げていく根源には、自然と人間への並々ならぬ愛情が不可欠と感じました。



▲宮城県岩沼市の東日本大震災復興
グランドデザイン / 2011年10月～
2012年7月にかけて、ワークショ
ップを中心に丁寧に被災地の住民の
方々の意見を集約していった石川先生
の環境デザインのプランは、岩沼市震
災復興計画の基本となりました。被災
者の移住先のスムーズな町づくりに結
実しています。

Message ～受験生に向けて～

1,2年生で、都市計画における環境デザインの方法や、自然環境における生態学、空間を認識する脳科学、水環境、エネルギー、さらに人の健康など基礎となる学問を学んだうえで、3年時に演習を行います。特定の場所を課題に設定し、それまで学んだ方法論を適用して分析し、実際に設計します。4年時は自らテーマを選んで調査分析から環境デザインを実施します。環境の創造を通して人を幸せにすることに生きがいを見出せる人に来てほしいですね。

